

中高生とともに差別と闘う

事実小説より奇なり

吉成タダシ



大切なことは

「私は、地区出身で不幸せって思ったことなんか無いよ。不自由も感じたことない。地区外の人でも、部落差別に反対してくれる人は山のようにいる。一人でも、もつともつと増えてくれたらいいなって思う。」

私は、差別する側でなくって良かったと思う。傷つける側でなくって良かったと思う。

「近い将来、差別する側、差別される側、どちらが後ろ指さされるようになるのでしょうか」って返事をブログに書いた。また荒れるかも…。私、これだけひどい経験したの初め。部落差別はまだ残ってる。先生の言ってたことは嘘じゃなかった。」

「嘘であって欲しい」と、どれだけ思い続けてきたことか。差別に遭った相談なんて、ない方がいいに決まっています。それでも、相談はやってきます。その度に、悔しさではらわたが煮えくりかえるような思いになります。

知識がなければ聞えない。でも同時に、何が正しくて何が間違いなのかを見極められる鋭い感性を持ち合わせていなければ、知識は悪用されかねません。では知識と感性があればそれでいいのか？ いえ、やはり行動にうつしてこそです。そして行動の中から、知識や感性をさらに磨き直していくのです。とはいえ、一人で行動するのは難しいものです。一人で聞える強い人もいるかもしれませんが、みんながみんな、そんなに強

く生きられるわけではありません。やはり、励まし合い、支え合い、共に闘う仲間が存在です。私は、その仲間の大切さを問うてきたし、そういう視点で仲間づくりをしてきました。だから、今回のように仲間として相談してくれるのはありがたいものではあるのですが…。

見えないものを見よう

今回、アツミからのメールを、できるだけ忠実な形で紹介しました。読者のみなさんに誤解を与えてしまわないかという不安がありながらも、取って提示しました。それは、無くなっているようで今もある部落差別の現実を、再確認してほしかったからです。部落差別が、「ある」のに、「ない」ことになっている、いえ、「ない」ことにしている現実から目を背けることなく、きつちりと見つめることから始めない限り、解決の糸口にもたどり着けないと思うからです。

そんな現実には身近にないとか、聞かれないうち方も、私の周りにはたくさんおられます。でも、だからといって部落差別がなくなったという証拠にはなりません。多くの方が、自身が遭った差別の現実を語りたがりません。それは恥であり、他人には言うようなことだと思ひ込んでいるからです。そう思ひ込んでいるのは本人の責任でしょうか。違います。周りの些細な差別的言動によつて、いつの間にかそう思わせられているのです。それを肌身で感じる

からこそ、本当のことが言えずにいいだけののです。それを、「ない」とにしてしまっても、根本的な解決につながるはずがありません。

とことん話し合ったからこそ

いじめの問題についても、同じような思いをすることがあります。「家族や先生など、身近な大人に相談しましょう」と言われることがありますが、誰彼構わず相談しようとするでしょうか。相談できそうな人を見つけて選んで、相談するのではないでしょうか。でもそういう大人が周りで見つけられなかったら、どうでしょう。

これまで何人もの子供たちが、見聞きした差別体験を話しに来てくれました。誰にでも話すわけではありません。部落問題にかかわって、人権問題にかかわって、とことん話し合った経験があるから、「この人なら話しても大丈夫」と思えるから、話すのです。話し始めると、それはもう堰を切ったように話し始めます。こんな思いをこれまで一人で抱え込んでいたのかと思うくらい話します。そんな、話してもらえような人に、自分が、あなたが、すべての人がなっていくことだと思ふのです。

事実は小説より奇なり

こんな思いを胸に秘め、また「S E A S O N S」の学習の合間でアツミの思いを滲ませながら、三年五組は仲間づくりを進めていきました。

そんな初夏に行われた体育祭。私がおねらいとしていた仲間づくりを象徴するかのよう出来事が起こりました。体育祭の最後の最後で、あんなドラマが待ち受けていようとは、思いもせませんでした。現実とは、私たちが想像する以上に、ドラマチックなものでした。もしこの世に神様がいたなら、これはきっと、神様がくれたプレゼントでないかとすら思ったほどでした。

体育祭前日、子どもたちは優勝に強くこだわっていました。そんな子どもたちには、「勝ち負けよりも大切なことがある」と言い続けて臨んだ、中学校生活最後の体育祭種目、全員リレー。それまでの子どもたちは、私の言葉などどこかに吹き飛んでしまいくらいに頑張り、運動が得意な子も苦手な子も、来たくなかった子ですら、種目結果の一つ一つに一喜一憂し、総合順位に注目していました。最後の種目、全員リレーが始まる直前の総合順位は第二位。前日までの練習を見る限り、全員リレーで優勝できる可能性は十分にありました。ということとは、逆転総合優勝を確実になものにしつつあるということでした。「最後の体育祭を優勝で終われる」そんな夢のような現実が、今まさに目の前にくつきりと見えかけていたのです。そしていよいよ、全員の視線がトラックに注がれるなか、最後の種目、全員リレーの火ぶたは、切つて落とされたのです。

(次回「涙の『全員リレー』」)